

## 横山源之助と郷土の人々

黒崎 真美

### 1、魚津町

左官職人の息子として育てられた横山源之助が、弁護士を目指し、社会の弱者の姿を世の中に問う文学者となったのは、魚津という町の気質や関わってきた人々が大きく影響を与えたと考えられる。

魚津町の人々の気質を象徴的に表すものの一つは、たびたび起きた米を巡る騒動への対応ではないだろうか。

魚津町から全国的に広がった米を巡る騒動として、一九一八年のいわゆる「米騒動」が注目されるが、明治期にも富山県下では何度となく発生していた。『高岡新報』（注1）の記者井上江花は米価に関する記事をたびたび書いていたが、一八六九年十月に塚越村で起きた「ばんどり騒動」について、

明治二年の十月、加賀藩知事の治下に属せる、越中国新川郡に蜂起せし、農民一揆の大騒動は、世に是れを『塚越のばんどり騒動』又は『忠次郎一揆』とも称へて、今に猶其凄まじかりし光景を記憶せる古老稀れなりとせざるものも惜しい哉未だ其顛末を叙して一篇の文章としたるものに接せず。思ふに此重大の出来事は越中国農史の上に、将また社会史の上に観過すべからざるのみならず、社会問題の勃興せんとする情勢ある、今日是れが調査の必要を痛感せしを以て、世は之れが材料の蒐集に手を着くることとし、杖を中新川郡内に曳けり。『江花叢書第十一巻 塚越ばんどり騒動』一九三三・三

と記している。他にも農民を中心とした年貢の減額を迫る騒動が一八六九年から一八七〇年にかけて起きているが、

江花はその中でも塚越の騒動が「社会問題の勃興」として特に注目に値すると考え、騒動から三十五年後の一九〇四年一月頃から三月十四日にかけて、『高岡新報 夕刊』に四十五回連載で詳細を紹介した（注2）。

『北国新聞』の創設者赤羽万次郎に誘われて一八九七年に臨時記者になった江花は、その紹介で権藤震二と出会う。権藤はもともと『毎日新聞』の記者であり、一八九四年に源之助が毎日新聞社に入社した時に在職していた。権藤は「社会問題に目を付けなければ」（注3）いけないと江花に話していたというし、江花自身も「救貧事業の活動を調べ」（同前）ており、社会問題に対する関心が権藤を介して江花と源之助を結びつけたのであろう。江花は「私の借家史（一）」（『江花叢書第一巻』一九二六・四）に、「天涯茫々生の横山源之助君だのが遊びに來た」と記している。江花の妻みさをの日記（注4）にも、一九〇〇年の八月から十一月にかけて、源之助が江花宅をたびたび訪れたことが記されている。一八九九年六月から療養のために魚津に帰郷していた源之助は、その間にも魚津取材した記事を中心に中央の雑誌や新聞に載せたり、地元紙の記事を執筆したりしている。新聞記者であった江花が、同郷の源之助との交流に刺激されたであろうことは容易に推測でき、この交流も考えられよう。

富山県警資料「富山県下における米に関する紛擾沿革一覽票」（注5）の一八七五年の記録に、「浜辺に至り輸出せむとする米倉庫に押寄せ、その結果「警察官吏の命に従ひ解散し、戸長役場の救助に止む」とある。この騒動が「戸出騒動」として『朝野新聞』（一八八七・二・十四）に掲載され、富山の米を巡る騒動が「初めて全国紙のニュースになった」（注6）という。

富山県警察資料には、一八八〇年に魚津町で起きた紛擾について、「町有志と謀り救助の途を講せしに依り鎮静せ

り」と記されている。これらの「救助」を行ったのは魚津町の富裕層の大梅寺屋（寺崎家）や四十物屋（山澤家）等であった。

山澤家の記録によれば、一八六九年七月二十八日に「夏以来諸物価まれなる高騰」（注7）のために「一〇七五貫文余施与す」（同前）とあり、また「他に寺崎与助五十五石二斗五升、大梅寺屋与次右衛門一五五七貫文」（同前）を寄付したことが記されている。この他にも学校への献金や、火災罹災や軍人家族などへの寄付を多数行っていたという記録も残っている。源之助は、「実業界に根を張れる貸金業者の大勢力」（『実業界』一九一〇・一〇）の中で、「魚津町の山沢長九郎（魚津銀行頭取）の如き、福岡町の石沢太平、保前次郎兵衛の如き、皆な米穀商で肥料商を兼ねてゐるもの、富豪界の顔振ではないが、米産地たる中越地方の実情を徴する好個の材料である」と記しており、山澤家を金融業で財を成した富豪のようなものと考えていた。

また、寺崎家（注8）や源之助が徒弟をしていた澤田家も、魚津町の苦境においては頻繁に寄付を行っていた。このような町の富裕層の有力者たちは一八七七年十二月に「魚津聯合会」を創設して会議を開いた。『魚津町誌』（注9）には、「明治十二年十一月、魚津町三拾ヶ町聯合会を開き、魚津町明理小学校階上に於て、管轄内共同の事業に付、協議決定せり、之を魚津町会の嚆矢となす」と記され、会議は翌年一月八日から七日間開かれたという。この会議の第四号議案には「魚津町古来共有宿用金蓄積並仕払方法の事」、第六号議案には「貧民救助の事」が挙げられ、貧民の救済や非常時の備蓄について取り決めを行っている。残念ながらその取り決めでは貧民の生活を救済するには十分ではなく、その後の騒動を防ぐことができなかったが、社会的弱者のために法整備を行おうとする魚津の有力者たちの試みは、魚津の人々に弱者救済の思想を植え付けることになったのではないか。このような町の気質は、源之助の根底に

「弱者救済」の芽を植え付けることになったのではないか。

注1 一八九二年四月二十日創刊

注2 富山県立図書館では、『高岡新報 夕刊』の一九〇五年二月

七日以前の紙面の複数が欠号のため、「塚越ぼんどり騒動」を掲載した可能性のある一九〇四年十二月から翌年一月、二月七日までは未確認。二月九日の第三十一回以降、三月十四日の第四十五回までは日を空けながら連載している。

注3 河田稔『ある新聞人の生涯』一九八五・七 新興出版社

注4 日記「宮のほとり」（『江花文集』第貳巻一九一一）には、八月九日の「横山源之助様夫不在中見ゆ」という記述以降、十四日・十七日・十八日・二十四日、十月七日・八日・十一日・十四日・十六日・二十一日・二十八日、十一月一日・三日に源之助の訪問が記録され、短期間に頻繁に江花宅を訪れたことがわかる。

注5 立花雄一『隠蔽された女米騒動の真相 警察資料・現地検証から見る』（二〇一四・七 日本経済評論社）に収録された「付・警察資料」内の「所謂『越中米騒動』二閱スル記録」資料（二）——（一九三六年十月編纂 富山県特高課）

注6 金沢敏子・向井嘉之・阿部不二子・瀬谷實『米騒動とジャーナリズム 大正の米騒動から百年』二〇一六・八 梧桐書院

注7 紙谷信雄「山澤長九郎家事績年表作成について」（『魚津史談』二〇一五・三）、山澤家資料「四十物屋（山澤）の歴史——市兵衛、長九郎、米太郎——」

注8 寺崎家資料「大梅寺屋（寺崎）の歴史——橘蔵、与次右衛門、弥四郎、平兵衛——」には、「安政五年七月二十日米価騰貴となり小前の者ともへの救済として米を施与する」という記述がある。

注9 『魚津町誌』一九一〇・一〇 復刻版一九八二・一 新興出版社

## 2、澤田六郎兵衛

源之助が魚津町字神明町の澤田六郎兵衛方の徒弟になったのは、一八八二年だという。当時、源之助が住んでいた金屋町など八つの町の戸長を澤田六郎兵衛が務めていたことが、澤田家の徒弟になった理由であろうか。確かな記録は残っていないが、この出来事がこの後の源之助の人生を決めたといえよう。

「中興七世」といわれた第七代六郎兵衛は『家憲』（一九〇六・九 尾澤屋報徳社）を作成し、家族や親族に配布したという。第七十七条まである『家憲』の第壹章「家憲綱要」には、

第一條 皇室を尊敬し神仏を信仰すること

第二條 祖宗父母の鴻思を忘れざる事

第三條 朝政を誹議せず国法を守るべき事

第四條 社会国家の為には応分の義務を尽すべきこと

第五條 尾澤屋報徳社を改善して模範報徳会と為し大に社会に貢献する様心懸べき事

第六條 法厳院崇祖誠明居士の精神を確守し至誠尊祖質朴節儉剛毅の美風を発揮する事

第七條

単木は折れ易く林木は折れ難し兄弟一致互に私を去り義を重んじ家運ノ隆盛を図るべきこと

と記され、第四條・五條の「社会国家の為の応分の義務を尽くす」や「社会に貢献する」という文面からは、自己の利益だけでなく社会を見据えて物事を判断するという澤田家の在り方が示されている。「尾澤屋」とは澤田家の屋号である。

「尾澤屋報徳社」について『魚津町誌』に、

本社は、明治三十七年二月、社長恰も東都に在りて、療病の際、二宮尊徳 道德經濟論てふ書物を読みたるが、動機となりて、創立せられしものにして、日露開

戦中は、或は静岡県報徳図書館より、報徳書を取寄せ、或は各地に於ける同主義の組織等を照会しなどして、一意設立の方法に務めしが、々々明治三十九年に至り、戦後国民の指導上、必要なるを認め、知名の士の賛同を得て、小戸浦報徳会を組織せり、時は即ち三十九年二月十五日なりき、然るに爾後主義の実行を謀りしが、余義なき事情に拘束せられ、一時休止せり。

然れども永く放棄すべきにあらねは、同四十年四月に至り、再興を謀り、名つくるに尾澤屋報徳社となし、同月廿三日を以て開会式を挙行す、抑も当社は、遠江国報徳社を本社と仰ぎ、常に指揮監督を受くるものにして、社長には澤田六郎兵衛を推し、二十四名の会員を有し、会員は善種として、毎月拾銭以上の貯金をなすべしとあり、又同主義にかゝる書籍の回覧法を設け、会員相互の向上と、実行とを企図せり、尚ほ将来は堅実なる魚津報徳社を設立し、遂には各村落に及ぼさんとの抱負ありと云ふ、徒らに拡張主義をのみ、念とする勿かれ

と、一九〇七年から「尾澤屋報徳社」を開設したことが記されている。『家憲』に記された「尾澤屋報徳社」が会員を募つて一九〇七年に組織として動き出したということだろうか。「実業界に根を張れる金貨業者の大勢力」（『実業界』一九一〇・一〇）にも、

魚津町郵便局長沢田六郎兵衛は、報徳教の奨励者、先頃記者に書信を送りて、同地に購買組合興り、商人の間に一種の恐怖を以て迎へられつゝある旨を報じて来た。渠は執れの階級に行はれ初めたるや、詳細を知るに由ないが、余は農民の間に購買組合の興らんことを切に希望する者である。（『横山源之助全集』第五卷）

と、八代六郎兵衛が「報徳教の奨励者」であると記されている。これらの記述から、澤田家が報徳を実践して社会福

社に努めてきた家柄であることは明らかである。  
源之助は澤田家について、「宿場の社会観察」（注1）の  
中で次のように書いています。

甲の家あり、今の主人に至る迄八代、旧幕時代の頃は、町年寄を勤めたる家柄にして、且つ今日に於ても旧高二百石許を有し、町内屈指の富豪たり、既に旧家にして富家なるの故を以て、町内の尊敬を受くること甚しく、当主人は町長の職に在り、家は町の「旦那様」と称せらるゝ場所にあれども、店には僅に醤油を商へるのみにして、深く商業に熱心せず、一に田地の收穫に依りて生活を維持するのみ、而して当主人の長男は、嘗て東京に遊べることにありて極めて家の繁昌を望める者、帰来、意を家事に注ぐことなく、日々為すこともなく日を消らし居れり、故を詰れば、なほ勇氣消磨せざるが如しと雖も、一家の経済は事業に手を延ばすの余地なしと称して憮然たり、しかも土蔵には、器具物品山積し、之を金額にするも優に事業を起すを得べし、之を以て責むれば、曰く、若し斯くの如きことあらば、老人（祖父）は、祖先を辱むる者として或は勘当の身となるべしと、因に云、此の地方にては、道具に資産を投ずること甚しく、一家の財産は其半ば之を各種の骨董品諸道具に捐て、而して貧富差等を別つ場合に於ても、亦た土蔵に存する諸道具を計算するを常とす、而して此の地方の習慣として祖先以来蓄積せる諸道具は、一切之を他に放つことをせず、若し斯の如きことあらば、祖先を辱むる者として一家の非難を受くるのみならず、亦た町内一同の攻撃を受く、甲家の長男が或は勘当を受けむと恐るゝもの、蓋し此の故なり、以て地方風俗の一斑を察すべく、地方人士の如何に経済に緩慢なるかを見るべし、或は言ふ者あり、甲家は、偏に田地の收穫によつて生活を求め、店商売なる醤油製造を廃せんとするの計画ありと。『横山源之助全集』

### 第三卷

澤田家は醤油醸造業を営み町内に複数の田地を持つ、魚津屈指の富裕な家柄であるが、それを源之助は「富豪」といい、七代六郎兵衛は町の人々から「尊敬を受」ける人物であると記している。源之助が徒弟になった当時の当主は一八六二年に襲名した第七代澤田六郎兵衛であった。七代六郎兵衛は長年にわたって戸長や町長（注2）を務め、一八八〇年に開かれた聯合議会にも参加している。また俳諧を嗜み、「筆邨」という号で一八八八年に詠んだ俳句「田に驚のかた足たて、時雨たる」（四季混題）が、魚津歴史民俗博物館に所蔵されている。現当主澤田昭英氏によれば、祖父第八代六郎兵衛も芸術に造詣が深く、書画を集め、掛軸の表装や襖の張替えなどは玄人耽ったという。魚津大火（注3）前の土蔵には、美術品の他様々な行事で用いた衣装や道具類がたくさん収蔵されており、徳富蘇峰と交流があったことを示す記録も残っているという。

また、第七代六郎兵衛の長男の長之助は源之助と同年に生まれ、一九〇六年に第八代六郎兵衛を襲名した。源之助と第八代六郎兵衛が忌憚なく話がでる親しい間柄であることもこの記事から読み取れる。

一九〇六年九月の『中央公論』に、源之助は次のように書いている。

日新戦役後文学の勃興と共に、一方には毎日新聞、国民新聞、時事新報等に、貧民労働者の記事続出すると共に、小説界にも「社会小説」といふ名称起り、文学社会に社会でふ文学が特殊の意味を作すに至れり。

#### 『横山源之助全集』第九卷

この「社会小説」を描く作家の一人として樋口一葉をあげており、一八九六年一月から一葉宅を訪れたり書簡の往復をしたりしている。同じように社会的弱者に目を向ける同志のような存在として、源之助は一葉を気にかけていた。萩野舎で富裕な家の子女とともに和歌や古典を学んだ一葉

も、澤田家で徒弟をした源之助も、貧富の大きな格差を実感することによって、後にその不公平感をエネルギーにして執筆したのだろう。数少ない源之助が残した書簡のうち、一葉に宛てた一八九六年八月二十四日附けた葉書は、「越中魚津神明町」（注4）発信である。神明町は澤田家の所在地であり、帰郷した源之助は澤田家に滞在したことが推測される。さらに、年代は不明であるが、第八代六郎兵衛に宛てた「訓点付唐宋八家読本」（注5）の借用依頼の書状からも、その親しさがうかがえ、二代にわたる澤田家との親密な交流が見えてくる。

そして、一八九九年から約一年の間源之助が寄居していたのは、小川山千光寺心蓮坊である。千光寺光学坊の大谷清雅住職によれば、澤田家は光学坊の檀家であるという。千光寺では檀家の子弟を修行のために受け入れる際に、同じ千光寺内の別の坊で修行させる習慣があったという。源之助が療養のために心蓮坊に滞在した理由は、澤田家との関係性が大きかったと考えられる。さらに心蓮坊の畠山寛禅住職は、源之助が滞在した部屋は修行者用の出入り口付近ではなく奥の間であることから、客人待遇であっただろうと述べている。二人の住職の言葉からも源之助と澤田家の密接な繋がりが推測でき、徒弟として澤田家と関係を持つて以降、長期にわたって澤田家が源之助の物心ともに後援をしてきたことがわかる。

一八八二年から富山県中学に入学する一八八五年までの、短期間ではあったが濃密な澤田家での時間は、少年源之助の感性を強く刺激しただろう。澤田家所蔵の書籍で学ぶことができ、書画・文学といった芸術に触れることができ、多感な少年期を過ごすには澤田家は絶好の環境だった。腕のいい左官職人の息子として中程度の生活をしていたであろう源之助は、思いがけなく澤田家で富裕な生活を垣間見ることになった。そこには公共事業のために寄付をし、貧民救済のために施与する社会があった。富山県下初の県中

学への進学を期待されるほど優秀な源之助であったから、富裕な社会の一方に貧しい暮らしをする人々の社会があることにも思いを馳せたに違いない。「社会問題」が源之助の眼前に横たわったのである。

注1 横山天涯茫々生 『太陽』一九〇〇・一二・一

注2 一八九八年四月三十日就任、一九〇二年四月二十九日満期退職。

注3 一九五六年の大火

注4 樋口悦編集『一葉に与えた手紙』一九四三・一 今日の問題社

注5 『或る一つの星の導くもの―横山源之助の業績と生涯―』（一九五六・三 魚津市横山源之助顕彰会 復刻 二〇〇三・二 魚津市教育委員会）には、「明治三十（一八九七）年前後？」と記されている。

### 3、阿波加脩造

阿波加脩造は、一八三五年に高岡の医家八代目佐渡養順の五男として誕生し、十六歳の時に魚津の医家阿波加玄李の養嗣になった。医師として魚津町の内外で活躍したのはもちろんであるが、一八六一年から一八七一年にかけて漢学塾を開いたり、一八七一年に教育訓蒙所の教官「文学訓蒙」となったりして、後進の指導にもあたった。魚津で初めて開校した魚津明理小学校（注1）では約一年の間「副師範心得」として、新川郡町立明理小学校開校時には校長（注2）として小学校教育に関わり、魚津の教育の基盤作りに力を注いだ。また、一八七九年十二月に開かれた「魚津町三拾ヶ町聯合会」の議長や、一八九四年三月に行われた第三回衆議院議員選挙で野村脩造の名で当選を果たして

国会議員も務めた（注3）。

『魚津町誌』の「善行者人物伝記」には、

資性温良篤実至誠以て事に当り諄々教へて倦まず、常に博愛慈善を行ふを以て自ら樂み、博覽強記百家の書に渉るるも、謙讓以て人に下り、内には父母に孝養をなし、一家親睦徳犬馬に及ぶ、出でゝは郷党、子弟の指導誘掖を事とし、余力を以て詩藻歌詞を調へ、文墨を弄して自ら遣り、風流自適興味津津たり、時人魚津聖人と尊敬する蓋し故あるなり（中略）先生の徳、医道に、教化に、慈善篤行に、文芸の上に、一新生面を与へられし功、実に著大なり、先生常に門下に語りて曰く、吾記性なく、学識なく、才幹なく、経験なく、金力なし、而して又曾て行為を以て、法律に触れたることなし、此之無齊の号ある所以なり、但一片報國の赤心は、未だ敢て軽々しく人に譲らず、此れは則ち郷等の後に立ち義務を社会に尽さんと欲して、其労を辞せざる所なりと、以て先生の素志一斑を窺ふに足る。と記されている。また同郷の黒田源太郎も、「越中国はまだしも、日本國中へ打出してもひけを取らない篤行家であつたと思ふ」（『炉辺夜話』一九三三・一〇）と脩造について記している。

源之助の「地方の青年」（天涯茫茫生『毎日新聞』一八九六・九・一八）には、次のような記述が見られる。

同好談話会と称する青年の一团と町の老先生何某氏との間に戦捷紀念碑文に就いて意見を異にし、青年の方勝利を得たるより遽に渠等青年の勢力も社会の上に認識せられたるものと相聞き候。

老先生某氏といへるは我地坊第一の名望家、何が故に名望あるものなりや事実を詮索せは判然不致候共、先生といへは町一般の者何がなし学者なりと認め、道徳家なりと信じ、仰いて之を崇ぶものあれども地に下して先生を論ずる者なく、或はその技倆を疑ふ者あるも

之に同ずる者なく、教育会を起せば氏を会長に戴き、国会議員の競争場裡に立ては党派の甲乙を挾はずしてその当選を望み、町民一般の氏を見る殆ど盲目同様、是非の差別を置かずして尊敬致居候処端なく碑文一件に於て氏をしてその文字を改めしむるに及ばず候段我町の上よりいへは近來の珍事。『横山源之助全集』第一卷）

これは「同好談話会」の青年グループが、町の誰もが異議を唱えなかつた名望家の「某氏」の「戦捷紀念碑文」の文面に反対し、内容を変えさせたことに對する賛辞と、今後も覺悟をもつて社会に関わつてほしいという期待を込めた激励文である。「老先生何某氏」の具体的な名前は記されておらず、源之助のその他の記述にもこれに類するものはないが、この當時の魚津町で「国会議員」になつた教育に熱心な人物は、阿波加脩造の他にはいない。「地方の青年」で話題となつた日清戦争の戦捷紀念碑（注4）は、脩造筆で「國光輝宇宙」と刻されたものが大町幼稚園園庭に残っている。

また、一八六四年に結成された漢詩の社中「清狂吟社」では、その「試業録」を脩造が書き残したという（注5）。「ばんどり騒動」についても数首の漢詩でその様子を描き残している。「己巳十月念九夜觀賊徒過二首」と題した漢詩には、

姦民嘯聚萬余名	炬火如流夜脚輕	敗笠斃蕘形独速
短筇長挺勢縱橫	毀焚催処焦天色	狙獬酣時動地聲
偏憾豪家無妙策	壺漿簞食笑相迎	
群雞呶呶報殘更	戸々懸灯任賊行	倉卒縱能容彼暴
廟堂寧敢厭民情	炬光東去風猶怒	鞋響南東雨未晴
隣保相呼空目送	無人不道待官兵	『魚津町誌』

と、騒動を起した者たちの暴挙が「狙獬」であり、為す術なく「賊徒」に屈する「豪家」の姿を描写している。そして騒動が瞬く間に広がり、官兵に収められてようやく人

々が「安堵」したと、これは「後世」の警めとするために「作歌」したのだと続く（注6）。貧窮した人々のやむにやまれぬ行動を間近で目撃した脩造は、この事件を深く心に刻んだに違いない。

一八八〇年一月に開かれた三拾ヶ町聯合会の第四号議案には、

魚津町共有宿用金原由たるや、往古市街の分限上等の者より多少の金を積号せ根金とし、就中当町限り融通錢札を中分以上の者に差出され、等級に応じ、義務として利子を取立て原金に積畳み、又諸營業の内より除金等の方法を設けしものとす、目下好否にかゝらず、該金を中分以上分限者は義務として預け、毎歳元利積算し備置きて、貧民救助、暨凶年等、非常の諸費は、勿論、宿万雑を一時振替、又相嵩むて補助し、或は産物の盛衰に関し、根金拂切に至らんとする時あるも、當時再三適宜を以て繼續し宿用金と称し、来る所の旧法により、即今便宜を加へ、更に蓄積するものは蓄積し、又支弁する方法を設け永續を欲望す。〔魚津町誌〕

とあり、「貧民救助」について議決している。福祉や教育についての協議がなされていたこの連合会には、阿波加脩造の他に澤田六郎兵衛も参加していた。二人は、魚津町の重鎮としてたびたび顔を合わせ、町のために様々な意見交換をしたと考えられる。阿波加脩造の言動や人となり、澤田六郎兵衛から源之助に語られていたとも推測できよう。

医家としての阿波加家の町民からの信頼は絶大であり、一九〇四年から一九〇五年の「軍人遺族患者無料施療者」（『魚津町誌』）を見ると、患者数は阿波加蕃が施療した数が群を抜く。阿波加蕃は脩造の娘婿である。一八五七年に脩造が自宅で開業してから、「貧窮治するの資なきものには、無料施療の途を与ひ、医道仁術の誠意に感泣するもの、其数方を以て数ふ」（『魚津町誌』）という阿波加家もまた、

貧民救済の心が代々受け継がれていた。

しかし、横山源之助と阿波加脩造の直接の接点は、一九〇〇年の魚津文庫設立時の発起人に名を連ねていること以外には見られない。『魚津文庫設立趣意書』（注7）に記された発起人は、次の十四名である。

西尾新 大久保與吉 横山源之助 吉澤庄作

傍田彌三郎 植木伊三郎 谷島喜太郎 松倉嘉

之吉 藤井務 阿波加修造 青山松太郎 澤

田六郎兵衛 本村松次郎 先名助七郎（『魚津市

史資料編』一九八二・三 魚津市役所）

魚津文庫の設立に際し、源之助は『富山日報』（一九〇〇・五・九、一〇）に有磯漁郎の筆名で「魚津文庫の設立を喜ぶ」を書いており、その最後に、

我国に在りて最も文化に遅くる、中越魚津地方に於て、社会教育普及の一方法として町立図書館の設立を聞き町会は御慶事記念として之を可決したるが如きは寔に喜ぶべきにあらずや、余輩は魚津張議員諸君及び其の発起に尽力せる諸子の労を多とす。

実業家よ、君等は図書館を利用し其の事業に關係する書籍統計に依りて実業家の頭腦を作れ、有志者よ君等は都会より流れ来る演説屋の議論に偏せずして新刊政治書目に依りて時勢の進歩を察よ、青年よ郷等は社会の新勢力たるを忘れず博く智識を求めて二十世紀の青年たる品位見識を作れ、而して一般平民諸君は、実業の余暇を以て読書の快樂を収め国家に在りて忠良の民となり社会に処しては聡明の人たるを期せよ、更に発起人諸君に望む、事を起すは易し、唯た之を始めて平民図書館たる実を示すは實に諸子の責任に属す、余輩は其の之を可決せる魚津町会議員に望むと共に深く発起人諸君に実績を挙ぐるに力を尽くされんを望んで已まざる也、魚津の一民として暫く廢したる筆を擲りて此の文を作る。

と記している。客観的に魚津文庫設立に寄せる期待を記しており、この文章からはその内実にあまり関わっていないかったのではないかと推測される。ちょうど一八九九年から一九〇〇年にかけて心蓮坊に寄宿していた源之助が、恩人である澤田六郎兵衛に誘われて発起人に名を連ねただけなのかもしれない。設立当初の蔵書に、源之助が刊行したばかりの『日本之下層社会』（二八九九・四 教文社）や『内地雑居後之日本』（一八九九・五 労働新聞社）が含まれていないことから、源之助の関わりの低さが感じられる。記録に残る阿波加脩造との直接の接点は魚津文庫設立だけであるが、源之助の社会の底辺に向けた関心は、澤田家で培ったものであろうし、すぐ近くにいた阿波加脩造という偉大な存在の影響を受けなかったとは考えられない。

#### 注 1

『魚津町誌』によれば、一八七三年四月に第六大学区新川県管内第一中学区魚津一番小学としてつくられたとある。開校にあたり第六大学区第九中学区魚津明理小学校に改称された。その後、分割統合を経て、一八八三年に富山県下新川郡町立明理小学校と改称した。さらに小学校令による分割統合を経、一八九二年には魚津町立明理尋常高等小学校を新設、一八九五年に魚津町立尋常高等小学校に改称した。一九四一年に大町国民学校と、一九四七年に富山県下新川郡魚津町立大町小学校と、一九五二年に現在の魚津市立大町小学校と改称した。

#### 注 2

一八八三年九月任命、一八八六年一月辞職。

#### 注 3

『下新川郡史稿 上巻』（一九〇九・九）に、「二十七年紀元二五五四 三月、野村脩造、衆議院議員に、七月濱田長次郎、県会議員に当選す」とある。

#### 注 4

『魚津町誌』に「校舎の南側に石碑あり、明治二十七八年戦勝記念碑にして、阿波加脩造翁の書にかゝる、國光輝宇宙

の五大金字あり、碑は奇岩堆積の上に建てられ、周らすに桜樹を以てせしは、大和心を表はすの意より出でしなるか、何にしても本町唯一の豊碑なり」と記されている。

#### 注 5

寺崎欣次「魚津の漢詩グループ「清狂吟社」あれこれ」『魚津史談』一九七九・三

#### 注 6

「十一月二日 賊勢益張 猖獗愈甚 於是官發兵 擊退之」『独速行並引』と題した漢詩が続く。

#### 注 7

「御慶事記念魚津文庫設立の旨趣」（『魚津市史 史料編』一九八二・三）

英聖文武なる明治天皇陛下を奉戴し茲に五千萬の日本臣民は空前の慶事に会せり即ち来月上旬を以て行はせらるゝ東宮殿下の御慶事はなり余輩臣民たるものは当に満腔の誠意を表して之れを祝せざるべからず知らず余輩臣民は如何なる方法を取りて祝意を表すべきや料理店に会して酒宴を開き快を一場に極むるは随分世間に行はるゝ所なれども斯の如きは決して褒むべき事にあらざるは今更言ふまでもなし然らば手段を祭礼に択びて興を一時に遣らむ乎是れ從來我地方に行はるゝ所にしてまた古来最も普通に行ふ所なれども僅に其日を過ぐれば煙散霧消何等奉祝の痕跡を留むるなきを奈何せん是に於て余輩発起人相会し当町に普通文庫を設立して以て奉祝の意を表せむことを決議せり（略）

#### 4、富山県中学

富山県中学（注1）が一八八五年二月に開校した時、源之助は創校一期生として入学したという。黒田源太郎は『炉辺夜話』の中で、「一商店の徒弟として置くよりは、中学校に入れて学問をさせた方が善いと勧むる人のあつた」ために源之助が進学したと記し、一緒に入学したのは「林茂、寺崎由之助、中村助松、竹内乙一郎、青山松太郎、岩崎文次郎、大島茂」の八名をあげている。また、



君は進んで第二年に入るや、三月の試験休暇中の或日、学友岩崎文次郎、大島茂（元五島と称す）の二人と相語らひ、無断退学して東京へ逃げたとも記されている。

『富中高百年史』（注2）には、富山県中学が開校した当時は二月と七月に新入生を募集し、二月当初は一七八名の入学生がいたと記されている。もともと、『富山県尋常中学校第五年報』（二八九〇）の卒業生の記録を見ると、入学した月にばらつきがあり、募集の月に関係なく入学する者があつたことがわかる。同窓会の『会報』第三號（注3）によると、一八八九年の第一回卒業生は二十三名しかない。そこには魚津から県中学へ入学したといわれる八人の中で、唯一「法学士 林茂」の名だけが記されている。第二回卒業生の中に「実業家 青山松太郎」の名があり、八人のうち卒業したのは二人しかいないことがわかる。ただ、青山松太郎が入学したのは「十九年二月」と記録されている（『富山県尋常中学校第五年報』）。卒業生の回顧録（注4）には、「五年生の岩城梅次郎、平田柏之助、細川貞篤、江口辰太郎、大管定治、中村助松、青山松太郎、竹内乙一郎、二川保平（後香川保志に改む）水島貞夫の十名が生徒総代として富山県庁に出頭」と、大谷津直麿校長に反発した「富中のゼネスト」の代表者が記されている。この記述から青山松之助、中村助松、竹内乙一郎が同級だったことがわかる。また、中村松之助は「大正、昭和初期ころの魚津情勢あれこれ」（『魚津史談』一九九六・三）に、祖父の中村助松は、富山に初めて中学校が開校されるや、当時魚津から通学していたものは八人で、そのうち一人でした、著名な友人に、

横山源之助（日本下層社会Ⅱ岩波文庫）や

南 弘（富山県初の大臣Ⅱ通信大臣）がいました。

と書いている。南弘については、『文武会報』（注5）の、「展覧会出品目録」に第二回卒業と同年であることが記さ

れている。

これらの記述を見ていくと、魚津の人たちにとって富山中学が開校した一八八五年入学者も翌年の入学者も、「創校当時の中学生」として一括りで記憶されていたのではないかと推測される。源之助が確かに一期生だったかどうかは、現時点で残る記録からは明らかにすることはできない。それでも源之助が開校したばかりの富山県中学に通っていたことは、当時の校長田中貞吉（注6）について書いた「南米移民の卒先者田中貞吉氏」（注7）の、

帰朝した田中氏は、眼中英雄なき東洋流の人物の事として、官途にも就かずに居たが、友人等の勧むるに任せて、海軍省に入つて、初めて給金取になつた。後ち、吉井友実氏に容れられず、都会を離れて、地方の中学校長と為つた。それは当時石川県より分離した富山県最始の中学校々長と為つたのである。余等が同氏を知つたのも、此の中学校々長時代である。中学校長としての田中氏は生徒には極めて評判の好い校長で、今日富山県出身の者で、博士となり、学士となり、士官となり新聞記者となつて、世間に名を知られてゐるものは、大抵氏の校長時代に中学生生徒であつた連中である。

（『横山源之助全集』第七巻）

という記述からも明らかである。

ともに上京し書簡往復があつた岩崎文次郎との親交はもちろん、中村助松とも第八代六郎兵衛澤田長之助宛の書面から親しい交流が推測される。青山松太郎は、魚津町の戸長にも名前が見られ、魚津文庫設立者にも名を連ねている。魚津に関する多くの記事を書いた源之助の情報源が、澤田家だけでなくこのような同級生たちでもあつたと推測できる。

- 注2 一九八五・一〇 富山高専学校創校百周年記念事業後援会  
 注3 一九一七・一〇 富山県立富山中学校同窓会  
 注4 第四回卒森井周義「富中時代の思出」『富中回顧録』一九五〇・九 富山県立富山中学同窓会  
 注5 一九三五・一二 富山県立富山中学校文武会  
 注6 『富中高九十年のあゆみ』（一九七五・一〇 富山県立富山高専学校同窓会）によれば、田中貞吉は一八八五年一月に初代校長として就任、一八八七年二月に退任した。  
 注7 原出…東西南北生「海外に於ける活動の日本男児」明治一九〇六・一『商業』、有磯逸郎『海外活動之日本人』一九〇六・一〇

# 5、おわりに

明治期の富裕層のステータスシンボルとして文学があつたのは、魚津に限らず樋口一葉が通つた萩野舎をみても明らかである。第七代澤田六郎兵衛は俳句を、阿波加脩造は漢詩を中心とした社交倶楽部のようなものが、魚津の富裕層の中で作られていたと考えられる。その中で公共事業の補助や貧民救済の相談がされ、その延長線上に三拾ヶ町聯合会のような公的な会が生み出されていったのではないだろうか。澤田家で徒弟をするという絶好の機会を得た源之助は、文学的表現力を磨き、社会問題を見つめる眼を養つたのである。そして、魚津で親交のあつた人々によつて築かれた源之助の情報網によつて、魚津の生活や困難をありのままに発信することができた。魚津の人々によつて社会問題を正面から見つめ表現する横山源之助が創られたのである。

『群峰 3』正誤表

P4 下段 023 日新 → 日清

P4 下段 032 萩野舎 → 萩の舎

P10 上段 014 萩野舎 → 萩の舎